

E-ジャーナル『中欧研究』の創刊に寄せて ——中欧をどのように捉えるか

柴 宜弘

はじめに

城西・中欧研究所 Josai Institute for Central European Studies が設立されたのは、2013年11月であった。この地域を扱う研究機関として、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター¹と東欧史研究会²が活動を行っているが、本研究所は中欧研究を進めるわが国初の研究機関である。学校法人城西大学がヴィシエグラード諸国（V4）のハンガリー9大学、ポーランド4大学、チェコ3大学、スロヴァキア2大学と学術・交流協定を結び、学生の交換留学や語学研修、学部でのハンガリー語、ポーランド語、チェコ語教育を踏まえての中欧研究所の出発であった。今後、V4諸国の大学に加え、スロヴェニアやブルガリアの大学とも協定が締結される予定である。

本研究所のE-ジャーナル『中欧研究』の創刊にあたり、私たちが考える中欧とはどのような地域なのかについて若干の説明をしておきたい。

1. 日本の東欧研究

この地域に関する日本の研究は、東欧研究として始められた。「敵国研究」として発展した冷戦期のアメリカ³の東欧研究とは異なり、戦略的・実利的ではなく、歴史的な観点を重視して客観的に進められたことがその大きな特徴である。

¹ 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターのウェブサイトは、<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>

² 東欧史研究会のウェブサイトは、<https://sites.google.com/site/tououshi/>

³ トドロヴァによると、冷戦終結後、アメリカの地域研究の枠組みは大きく変化し、東欧を含めた「全米スラヴ研究学会」(AAASS)の名称が「スラヴ・東欧・ユーラシア研究学会」(ASEEES)に変わり、東欧研究関連のセンターの多くがヨーロッパ研究センターに鞍替えし、現在、大学で東欧関連の講座に職を得ることはますます困難になっている。Maria Todorova, “East European Studies in the United States; Thematic and Methodological Problems”, in Christian Promitzer, Siegfried Gruber, Herald Heppner(Eds.), *Southeast European Studies in a Globalizing World*, LIT Verlag, Wien and Berlin, 2014, p.62.

一般的に、「東欧」とは第二次世界大戦後、ソ連のもとで社会主義国となったソ連圏の国々と捉えられた。現在の国名からすると、北からポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリア、旧ユーゴスラヴィア諸国のスロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、セルビア、モンテネグロ、マケドニア、コソヴォ、そしてアルバニアである。しかし、1975年に設立された東欧史研究会の参加者には、東欧に関するつぎのような共通認識があった。歴史的な観点からこの地域を考えてみると、近代においてハプスブルク帝国とロシア帝国、プロイセン（ドイツ帝国）の統治下におかれた東中欧 East Central Europe (中欧 Central Europe) とオスマン帝国支配のもとにおかれたバルカン the Balkans (南東欧 Southeastern Europe) とに区分される。この多様な地域が、西欧とは異なる近代を経て、政治的、経済的、そして社会的にも共通の特色をもつことになるので、一つの地域としてくくることができる。これが東欧という地域理解であった。したがって、日本では欧米の東欧認識とは異なり、オーストリアもギリシアも東欧研究の対象とされた。冷戦終結後、政治的な観点に煩わされることなく、歴史的観点から東欧を捉えることが容易になったとさえ言える。

しかし、最近では東欧という地域を歴史的な一体性がいっそう顕著な中欧とバルカン（あるいは南東欧）に区分して、研究対象とする傾向が強くなっている。この結果、細分化された地域の詳細な研究が可能になったことは確かだが、反面、細分化により見えなくなった部分もある。多様な要素からなる東欧は西欧との比較や関係のなかで、一定のまとまりをもつ地域であった。東欧を細分化してしまうと、東欧の多様性を地域内で比較してみることが困難になり、細分化された地域の同質性のみが前面に押しだされてしまう。そもそも、地域とは同質性だけから成り立つのではなく、多様性のうえにも成立するのである。また、地域概念を固定したものと考えるべきではなく、それは歴史的に伸縮するのであり、対象とする研究者の問題関心から組み替えられる可変的なものである。

例えば、日本の東欧史研究に多大な影響を与えたハンガリー出身のアメリカ人歴史家ベレンドは 1989 年の東欧諸国の体制転換以前には、ソ連圏としてのこの地域を東欧（正確には東・中欧 East-Central Europe）と称していたが、冷戦終

結後には中・東欧 Central and Eastern Europe という概念を用いている。ベレンドは最近の著書で、この地域の範囲はヨーロッパ大陸の東半分であり、東欧、中欧あるいは中・東欧と称されたと述べ、ランケからハンガリーの歴史家スューチ⁴まで、この地域の概念をめぐる様々な議論はあるが、第一次世界大戦までハプスブルク帝国、ドイツ帝国、ロシア帝国、オスマン帝国の支配下におかれ、戦間期にはドイツで「狭間のヨーロッパ」(Zwischen Europa、英語では in-between Europa)と称された地域だとしている。ロシア(ソ連)とドイツに挟まれたこの地域の特徴はヨーロッパ大陸の西半分とは異なり、第二次世界大戦期まで、農業地域にとどまり、国民形成が完了せず、国境や国家が現在に至るまで変化し続けたことである。ベレンドはこのように中・東欧を特徴づけたうえで、ヨーロッパを3つに区分する。ギリシア、イタリア、ポルトガル、スペインは南欧あるいは地中海ヨーロッパ、オーストリア、ベルギー、イギリス、デンマーク、フィンランド、フランス、ドイツ、アイルランド、リヒテンシュタイン、ルクセンブルク、オランダ、ノルウェー、スウェーデン、スイスが西欧、これ以外が中・東欧ということになる⁵。

ここからわかるように、ベレンドは冷戦終結後に、ソ連圏という意味合いが付与されてしまった東欧という地域概念を中・東欧に変化させているが、オーストリアとギリシアをここに含めていない。ベレンドの社会・経済史の分析手法からすると、第二次世界大戦後の社会主義の経験は大きな意味を持つので、オーストリアとギリシアをこの地域区分に含めていないものと考えられる。これに対して、日本では現在でも政治的な観点からではなく、歴史的な観点からする東欧という地域概念の研究上の有効性が保持されている⁶。中欧とバルカンという東欧の下位地域に研究対象を特化する場合でも、オーストリアを中欧に、

⁴ スューチの著書『ヨーロッパの三つの歴史的地域』については、篠原琢「地域概念の構築性——中央ヨーロッパ論の構造」家田修編『講座スラブ・ユーラシア学1 開かれた地域研究へ——中域圏と地球化』講談社、2008年、121-124ページを参照。篠原によると、スューチはヨーロッパを西欧、東中欧、東欧に3区分する。近代市民社会が形成された西欧、国家と社会が分離されなかった東欧、西欧と同じ政治・社会上の構造をもちながら、両者のあいだを往来した地域が東中欧とされる。

⁵ Ivan T. Berend, *From the Soviet Bloc to the European Union; The Economic and Social Transformation of Central and Eastern Europe since 1973*, Cambridge U.P., 2009, pp.3-4.

⁶ 例えば、柴 宜弘・伊東孝之・南塚信吾・直野敦・萩原直監修『新版 東欧を知る事典』平凡社、2015年を参照。

ギリシアをバルカンに組み込むのが一般的である。

このような研究状況において、わが国ではあえて東欧に代わる地域概念を用いる必要性はないように思われる。しかし、体制転換後の V4 諸国ではヨーロッパへの回帰と多様性の回復が強調され、自らの地域を中欧と位置づけて、長いオスマン帝国の支配を受けたバルカン諸国と区別する傾向が顕著である。中欧という地域概念がどのような経緯を経て生み出されたのか。つぎに、東欧という地域概念より、さらにあいまいで政治的な概念である中欧について概観してみたい。

2. 様々な中欧概念

周知のとおり、中欧という地域概念は歴史的に見ると二つの潮流をもっている。一つは近代のドイツ史の中心的な概念として現れた。1871 年のドイツ帝国成立以後、中欧構想はドイツ系民族の統合を図る汎ゲルマン主義と重なり、「バルト海からアドリア海」までを視野に入れるようになった。第一次世界大戦時の 1915 年、ドイツ帝国の帝国議会議員ナウマンが著した『中欧論 *Mitteleuropa*』⁷はその代表的な例であり、大ドイツ主義、つまりドイツ帝国とハプスブルク帝国との統合をすすめる、戦況の変化に伴い、ベルリンからバグダッドに至る広範な領域を射程に収めている。こうした考えはドイツ帝国主義を正当化するイデオロギーと見なされ、さらに、ナチ・ドイツの「生存権 *Lebensraum*」構想に直結したとされたため、第二次世界大戦後、中欧論はタブーとされ、しだいに政治的な議論の場から見られなくなった。

これに対して、大ドイツ主義的な中欧論とは別に、中欧を諸民族の共存の場あるいは多様性を保障する空間としてとらえようとする潮流があり、戦間期には国境を超えたさまざまな枠組みが提示された。それは、とくにチェコスロヴァキアで顕著⁸だったようである。しかし、第二次世界大戦とその後の冷戦によ

⁷ ナウマンの『中欧論』の詳細な検討については、板橋拓己「『中欧』の理念とドイツ・ナショナリズム（１）、（２）」『北大法学論集』55（6）、2006年、474—429ページ、56（1）、2006年、514—468ページを参照。

⁸ チェコの歴史家パラツキーの中欧論については、篠原琢、前掲論文、127—136ページ、チェコスロヴァキアの政治家マサリクの中欧論については、林忠行「戦略としての地域—

って、ヨーロッパは政治的に東西に二分されてしまい、東西冷戦体制のもとで、多様性を保障する空間としての中欧が議論される機会はなくなった。スューチの『ヨーロッパの三つの歴史的地域』が出版されたのと同じ1983年、チェコスロヴァキアの亡命作家クンデラがフランスの雑誌に「誘拐された西欧——中欧の悲劇」⁹というエッセイを発表した。クンデラはチェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランドの三国を中欧と称して、文明的に異質なロシア（ソ連）によって「誘拐された」この地域の「悲劇」を論じた。

これを契機として、中欧をめぐる議論が復活した。これらの議論は東欧の「反体制知識人」のあいだで、もっぱら冷戦後のソ連による東欧支配、とくに1968年の「プラハの春」鎮圧以降の状態からの回復に集中した¹⁰。もっとも、クンデラの真意は、中欧の悲劇がソ連の支配にあるのではなく、ヨーロッパの重要な一部をなすはずの中欧がヨーロッパから忘却されていること、ヨーロッパがその忘却に気づいていないことにあるとされる¹¹。

1989年の東欧諸国の体制転換後、ソ連圏を脱したチェコスロヴァキア、ハンガリー、ポーランドの3国は安全保障面および経済上の必要性から中欧という枠組みで地域協力を進めた。1991年2月に、ハンガリーの古都ヴィシェグラードで中欧3国の首脳会議が行われ、協力のための宣言が出された。この協力はヴィシェグラード3国協力と呼ばれたが、1993年1月にチェコスロヴァキアがチェコとスロヴァキアに分離すると、ヴィシェグラード4国協力と称された。V4諸国はヴィシェグラード協力発足当初、安全保障面での最終的な目標である

—世界戦争と東欧認識をめぐって」家田修編、前掲書、99—106ページを参照。戦間期から第二次世界大戦期に、経済的な視点から出されたいくつかの中欧連邦構想については、福田宏「ポスト・ハプスブルク期における国民国家と広域論」池田嘉郎編『第一次世界大戦と帝国の遺産』山川出版社、2014年、114—129ページを参照。福田は、ハンガリー人ハントシュが1920年代後半から30年代にかけて、経済面からパン・ヨーロッパを実現させるため、ハプスブルク継承諸国に中欧研究所（Mitteleuropa-Institut）を設置したことを指摘している。

⁹ 邦訳は、クンデラ、里見達郎訳「誘拐された西欧——あるいは中央ヨーロッパの悲劇」『ユリイカ』1991年2月号、62—79ページ。

¹⁰ 旧ユーゴスラヴィアにおける中欧論の反響については、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのモスタル出身で、長期にわたりローマ大学文・哲学部でスラヴ文学の教授職にあったマトヴェイエヴィチのエッセイ「中央ヨーロッパの幻想」プレドラグ・マトヴェイエヴィチ、土屋良二訳『旧東欧世界——祖国を失った一市民の告白』未来社、2000年、67—82ページを参照。

¹¹ 篠原琢、前掲論文、125ページ。

NATO 加盟をめぐり足並みがそろわずに、政治・安全保障問題は先延ばしにした。これに代わって、経済協力が前面に押し出されて、1993年に4国間で発効したCEFTA(中欧自由貿易協定)に特化してゆく。その後、1999年にチェコ、ハンガリー、ポーランドの3国が、2004年にはスロヴァキアがNATOに加盟し、同年には4国が同時にEU加盟した。これにより、ヴィシェグラード4国協力のもつ意義は失われたと考えられた。しかし、中欧の4国はEUやNATO内で新たな共通の課題を見だし、協力関係を深化させている¹²。

V4諸国はヴィシェグラード協力をヨーロッパの下位地域協力と位置づけているが、興味深いのは、この協力の枠内で、学术交流や環境保護などを推進する目的で設置されていた国際ヴィシェグラード基金(IVF)が、V4諸国の対外政策を進めるためにも利用できるように再編成されたことである。例えば、ヴィシェグラード奨学金プログラムは中欧の4国だけでなく隣接地域にも拡大されて、EU域内外の多くの学生・院生・留学生の受け入れや送り出しが可能になった。

3. 中欧をどのように捉えるか

このように、V4諸国が地道に中欧の地域協力を進めているため、現在、チェコ、ハンガリー、ポーランド、スロヴァキアの4国が中欧諸国であるとの捉え方がなされる傾向が強い。しかし、これまで概観してきたように、中欧という地域概念はさまざまな歴史的背景のもとで用いられてきた、きわめて政治性の強い地域概念である。私たちは中欧という地域概念をどのように考えたらよいのだろうか。ひとまず、戦間期にソ連とドイツのあいだの「狭間のヨーロッパ」と称された多様な地域と捉えることにしたい。ヴィシェグラード4国だけを中

¹² Andrzej Sadecki, "Visegrad Group 1991-2004: Emergence and Development of a New Sub-regional cooperation in Europe" in Natasza Styszynska(ed.), *Towards a Common Education Area in the Visegrad Region: New Modalities of Co-operation within International Relations and European studies Programmes*, Krakow, 2012, pp.21-26; Jakub groszkowski, "Current Challenges and Perspectives on the Visegrad Group Co-operation", *ibid.*, pp. 27-32. グロシュコフスキはヴィシェグラード4国の共通の課題を、①中欧の東側諸国および南側諸国の安定、②否定的な共産主義の遺産の克服、③EU内部の不均衡の減少、④4国の結束、人的交流と指摘している。

欧とするのは狭義の捉え方にすぎない。

1989年の東欧諸国の体制転換をはさむ時期に、ワシントン大学から10冊のシリーズで「東中欧の歴史」が出版された。1993年に刊行されたこのシリーズの第一巻『東中欧の歴史地図』¹³は、適切な解説とともにきわめて詳細な地図を網羅しており、高い評価を得て現在でも参照される機会が多い。この歴史地図の編者マゴチによる東中欧の概念規定は、再考してみる価値がある。マゴチによると、東中欧とはその西側においてドイツ語およびイタリア語話者からなる言語上の境界線、東側において旧ソ連の政治的な国境線、北はバルト海、南は地中海に挟まれた地域である。1993年時点の具体的な国名として、ポーランド、チェコ、スロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、スロヴェニア、クロアチア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、新ユーゴスラヴィア（2006年にセルビアとモンテネグロに分離）、マケドニア、アルバニア、ブルガリア、ギリシアが列挙されている。しかし、この歴史地図は東中欧と歴史的に密接な関連をもつ、西側ではドイツの東部地域（ブランデンブルク、ザクセンなど）とバイエルン、オーストリア、イタリア北東部（ヴェネツィア）、東側ではリトアニア、ベラルーシ、ウクライナ西部、モルドヴァ、そしてトルコの小アジア西部まで含んでいる。

ここで示される東中欧は、日本で考えられてきたオーストリアとギリシアを含む東欧という地域概念よりさらに広い概念である。マゴチはこの広義の東中欧という地域は、まさにヨーロッパ（西はジブラルタル海峡からウラル山脈まで）の西部と東部の中央に位置しているので、正確には中欧と呼ばれるべきだと述べる。しかし、ヨーロッパを西欧、東欧、中欧に3区分する方法は、「東欧」という冷戦期の政治的な概念がそこに住む人々から拒否反応を示され意味もたなくなってしまう。そのため、ヨーロッパを西欧と、中欧ではなくより正確な呼称として東中欧に区分するのが妥当であると説明している¹⁴。

私たちは、このようなマゴチが規定する東中欧の地域をあえて中欧と考えることにしたい¹⁵。日本で捉えられてきた東欧よりかなり広い概念であり、いくつ

¹³ Paul Robert Magocsi, *Historical Atlas of East Central Europe*, University of Washington Press, 1993.

¹⁴ *Ibid.*, p. xi.

¹⁵ 例えば、大津留 厚もマゴチと同様に、中欧を広範な概念と捉えている。大津留によると、ロシアとドイツに挟まれた地域を東欧とすれば、中欧はこの東欧プラス「広い意味で

もの中心をもつ多様な地域である。たしかに、ウィーンはその一つであるが、ブダペストもプラハもミュンヘンもチューリッヒも中心である。ワルシャワ、クラクフ、ブラティスラヴァ、リヴィウ、ヴェネツィア、トリエステはもとより、ザグレブ、ベオグラード、サラエヴォ、そしてブカレスト、ソフィア、テッサロニキも忘れてはならない。E-ジャーナル『中欧研究』が、この広範で多様な地域を対象とする新たな研究を生み出す場となり、英語を共通語として成果を国外に発信する媒体に成長することを願っている。

のドイツ」である。「広い意味でのドイツ」とは「民族ドイツ」のことではなく、ドイツ系君主の支配領域、およびドイツ系住民と不断に接触してきた地域のことであり、スイスの大部分、デンマークの南部、イタリアの北部にもおよんでいると述べる。大津留 厚編『中央ヨーロッパの可能性—揺れ動く歴史と社会』昭和堂、2006年、2ページを参照。